

今週の為替相場見通し(2017年8月14日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.72 ~ 110.92	109.17	107.50 ~ 111.00
ユーロ	(ドル)		1.1689 ~ 1.1848	1.1818	1.1700 ~ 1.1950
(1ユーロ=)	(円)		128.05 ~ 130.86	129.07	127.00 ~ 131.00
英ポンド	(ドル)		1.2939 ~ 1.3059	1.3012	1.2950 ~ 1.3150
(1英ポンド=)	(円)	*	141.26 ~ 144.72	142.09	140.50 ~ 143.50
豪ドル	(ドル)		0.7839 ~ 0.7949	0.7895	0.7700 ~ 0.8000
(1豪ドル=)	(円)	*	85.45 ~ 88.02	86.20	84.00 ~ 87.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 森谷 友一

(1)今週の予想レンジ: 107.50 ~ 111.00 円

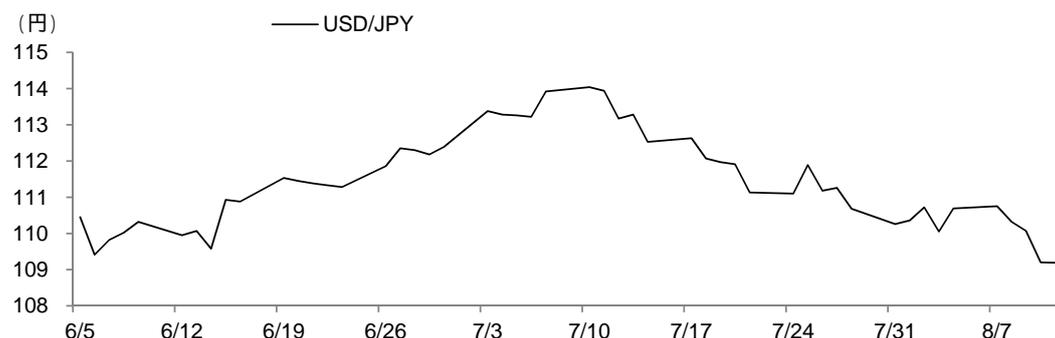
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は軟調な展開。週初7日に110円台後半でオープンしたドル/円は、4日(金)の良好な米7月雇用統計の結果を受けたドル買いの動きに支えられ一時週高値となる110.92円をつけた。8日は日経平均株価が2万円を割り込む展開に110円台前半まで値を下げたが、米6月JOLT求人件数が予想以上に増加すると110円台後半まで反発。しかし、北朝鮮が弾道ミサイルに搭載可能な小型核弾頭の製造に成功したとの報道や、トランプ米大統領の北朝鮮を強くけん制する発言を受け、リスク回避の円買いが強まり再び110円台前半まで反落。9日もリスク回避の円買いが強まり110円を割り込んだ。さらに、パリ郊外においてフランス軍当局者に乗用車が突っ込む事件が発生し、テロへの警戒感が強まり欧州株が軒並み値を下げると109円台半ばまで下落。しかし、ティラーソン米 국무長官が北朝鮮との緊張を抑制する発言をすると、ショートカバーから110円近辺まで反発。10日は再びリスクオフムードが強まり109円台半ばまで値を下げ、さらに弱い米7月卸売物価指数(PPI)の結果を受けて109円台前半まで続落。11日は東京市場が祝日で休場となる中、北朝鮮情勢への警戒を背景にアジア株が全般的に下落する動きに108円台後半まで値を下げ、米7月消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回ると一時週安値となる108.74円をつけた。ロシアのラブロフ外相が北朝鮮を巡る緊張の緩和に向けロシアと中国による共同計画があるとの発言を受け109円台半ばまで値を上げる局面も見られたが、その後は伸び悩み109円台前半で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い推移を予想する。先週は北朝鮮情勢の緊迫化を受けてリスク回避の動きが強まりドル/円は大きく下落。早期解決の目途は立っておらず、軍事衝突のリスクも強く意識されている状況下、引き続き世界的なリスクオフムードが継続することとなりそうだ。北朝鮮によるさらなる挑発行為があった場合には一段と水準を下げる局面も想定しておきたい。また、米国で先週発表された米7月PPI、7月CPIは共に冴えない結果となっており、足元で高まっているインフレ鈍化懸念を払しょくさせる内容とはならなかった。今週は15日(火)の米7月小売売上高、16日(水)の7月FOMC議事要旨公表に注目が集まるものの、インフレ懸念の後退につながる可能性は低いと考えられることや、9月FOMCにおけるバランスシート縮小の発表は相応に織り込まれていることを勘案すると、積極的なドル買いをもたらす材料とはなりづらいだろう。また、夏季休暇で流動性が乏しくなる中、ニュースヘッドラインを受けて値が飛ぶ可能性には警戒しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/7~8/11)の値動き: 安値 108.72 円 高値 110.92 円 終値 109.17 円



2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1700 ~ 1.1950 127.00 ~ 131.00 円

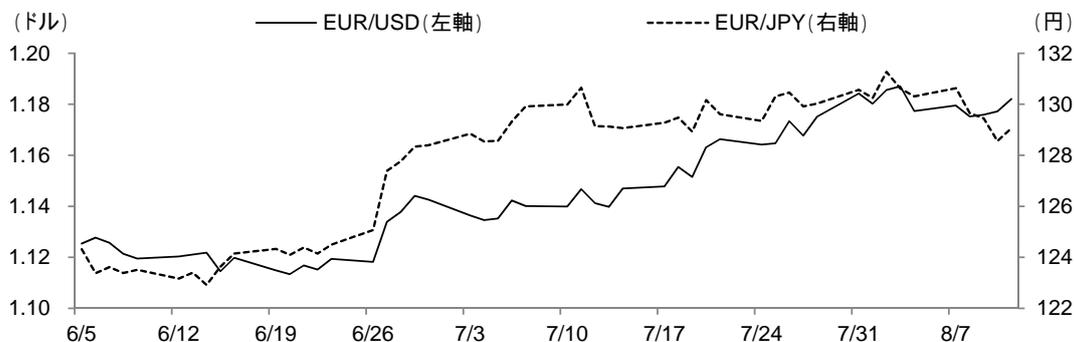
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は米経済指標、米要人発言並びに北朝鮮情勢を材料に行き来した展開。週初7日、ユーロ相場は対ドル1.17台後半にてオープン。前週末の米雇用統計の結果を受けたドル高基調は継続せず、材料難の中で1.18を挟んでのレンジ推移となった。翌8日、米6月JOLT求人統計の良好な結果を受けドル高ユーロ安に推移し1.17台前半まで下落。その後、「北朝鮮が小型核弾頭を開発」とのヘッドラインが報じられたが、ユーロ/ドル相場への影響は限定的。週央9日、前日安値を更新する局面では売りが加速し、節目となる1.17ちょうどを割り込んで週安値1.1689をつけた。しかしながら下落は続かず、売り一巡後は1.17台半ばまで水準を戻す。翌10日、北朝鮮による「ゲラム方面への弾道ミサイル発射を検討」との報道を受けアジア株・欧州株が軟調に推移する中でユーロ相場は1.17台ちょうど近辺まで下落。しかしながらその後、ダドリーNY連銀総裁のインフレ率に対する弱気な発言が報じられるとユーロ相場は切り返し、1.17台後半まで上昇。週末11日、米7月CPIの冴えない結果やカシユカリ・ミネアポリス連銀総裁のハト派的発言を受け米金利が低下する中でドル安が進行し、ユーロ相場は週高値となる1.1848を示現した後に1.18台前半水準にて越週した。一方、対円では130円台半ば水準にてオープン。週初7日に週高値となる130.86円をつけた後は、北朝鮮情勢を受けたドル円相場下落の影響から水準を切り下げる展開。週末11日には週安値128.05円を示現したが、その後はユーロ相場の騰勢を受け129円ちょうど近辺まで水準を戻して越週した。

今週のユーロ相場は底堅い展開を予想する。カレンダー的には注目材料を欠く夏季休暇シーズンへ本格突入する事となるが、足許では北朝鮮情勢を受けた地政学リスクの高まりが相場のメインドライバーとなりそうである。ユーロ相場に与える影響としては、リスク回避相場となる中、欧州株式の下落とユーロ安進行、もしくは米株並びに米金利低下を受けたドル安進行という相反する影響が考え得るが、北朝鮮情勢との関わりが強さおよび先週目立った米当局者のハト派的スタンスに鑑みれば後者の影響が相対的に大きくなると予想される。他方、来週17日(水)にはECB政策理事会議事要旨(7月会合分)の公表が予定される。ハト派色の強い結果となった同理事会が改めて材料視されユーロ安の切っ掛けとなることは想定し得るが、同理事会後のドラギECB総裁会見における「(テーパリングに関して)秋には議論が行われる」との発言を思い返せば、影響は限定的となるだろう。総じて翌週後半に予定されるジャクソンホール経済会議を前に動意薄い展開が予想されるが、ユーロは相対的に底堅く推移することを予想する。なお、その他の重要な経済指標・イベントとしては、15日(火)に独4~6月期GDP(速報値)、16日(水)にユーロ圏4~6月期GDP(速報値)、17日(木)にユーロ圏6月貿易収支およびユーロ圏7月消費者物価指数(HICP、確報値)、18日(金)に独7月PPIおよびユーロ圏6月経常収支の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/7~8/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.1689 高値 1.1848 終値 1.1818
(対円) 安値 128.05 高値 130.86 終値 129.07



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3150 140.50 ~ 143.50 円

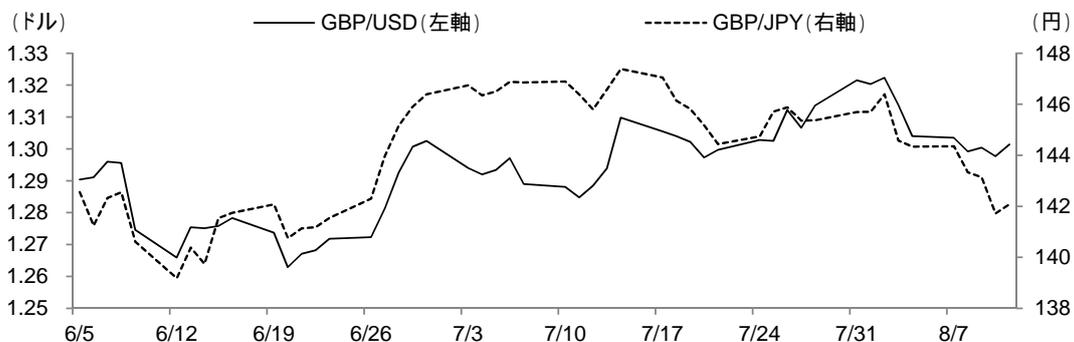
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル、対ユーロで軟調気味の横這い。北朝鮮と米の軍事的緊張の高まりを受けた株安・リスク回避の流れで、対円では明確に水準を切り下げた。前週末の米7月雇用統計(4日)後のドル全面高から週末をまたぎ、週明けの主要通貨市場は方向感に乏しい滑り出し。しかし、8日にはさっそく慌ただしい動きが見られた。まず、米労働省発表の6月求人件数が予想外の強い伸びを示したことでドルが再び全面高に振れた。同求人件数は従来それほど市場の関心の高い統計ではなかったし、そもそも6月の統計と古い数字だったが、上述米7月雇用統計の上振れがドル全面高を煽った直後だったこともあり、市場のドル買いの動きを誘ったのであろう。その後「北朝鮮が弾道ミサイルに搭載可能な小型核弾頭の製造に成功した」との米紙報道に、今度は円が全面高に。この円高は、世界的な株安と同時に進行し、リスク回避の流れの一環と位置付けられた。その後も、北朝鮮と米の間の緊張感が高まるのと並行して、週引けまで株安と円高とは続いたが、並行してその他の通貨は方向感を見出せなかった。週引け間際、11日に発表された米7月消費者物価指数が市場予想を下回ったことで、米連銀による追加利上げ観測が若干後退したようだが、通貨市場では、ユーロが一時的に対ドルで上昇したのが目立った程度だった。

今週の英ポンド相場は、英経済指標待ちの膠着を中心に、敢えて方向感を見るなら、対円を中心とした堅調を見込む。英からは15日(火)に7月消費者物価指数、16日(水)に4~6月失業率(ILO基準)、同平均賃金、17日(木)に7月小売売上高など主要経済指標の発表が相次ぐ。3日の英中銀金融政策委員会などを経て、同銀に対する早期利上げ期待は概ね沈静化しており、余程意外感の強い数字でも並ばない限り、ポンドの値動きに影響する可能性は低いと見込むものの、それでも様子見の言い訳ぐらいにはなるのではないか。対円に先導された反発余地を見るのは、北朝鮮のミサイル攻撃懸念を理由に円を買い上げる値動きに違和感が拭えないから。地理的な近接さに加え、現在懸念されているグアム方面を標的としたミサイルが日本上空を通過する可能性を考慮すれば、円が「安全資産」として買える状況にあるとは思えない。逃避通貨としての円の魅力がある程度認めるとしても、韓国ウォンが売り込まれるのと並行して、円が買い上げられる現状には、行き過ぎの感が強い。過去、震災などを契機に、保険金支払いのための巨額の外貨建て資産の円回金が円高を促した経緯はあったものの、今般の状況がその再現につながる可能性も考え難い。仮に北朝鮮によるミサイル攻撃が日本で巨額の被害を生んだとしても、(それがテロと認識された場合は話が別だが)戦争の被害は免責となる可能性が高く、保険金の支払いにつながる可能性は低いのではないかと。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/7~8/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.2939 高値 1.3059 終値 1.3012
(対円) 安値 141.26 高値 144.72 終値 142.09



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7700 ~ 0.8000 84.00 ~ 87.00 円

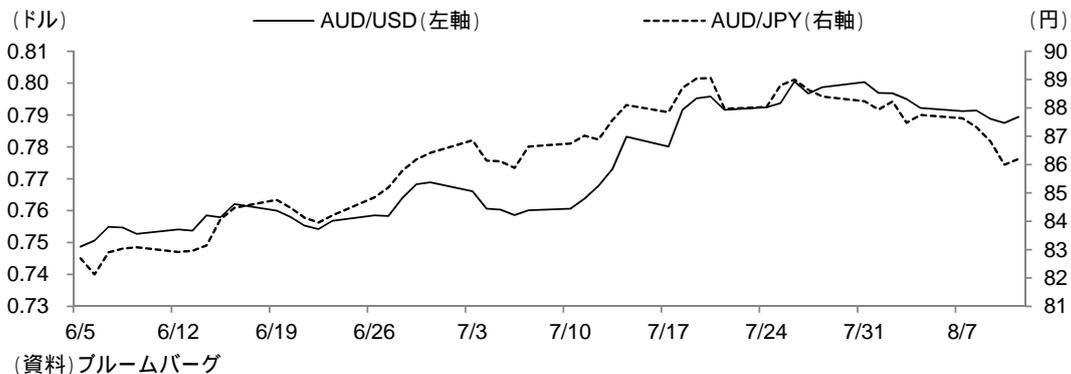
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は緩やかに下落する展開となった。週初7日に対ドル0.7920レベル、対円87.70円レベルでオープン。シドニー休場となる中、アジア時間帯に一時週高値となる0.7949をつけたものの、前週発表された米7月雇用統計後のドル買いの流れが継続し、徐々に0.7900近辺まで下落。8日は0.79台前半で揉み合い推移が続いていたが、北米時間に発表された米6月JOLT求人件数が統計を開始した2000年12月以降で最高を記録したことを受け、ドル買いの流れが強まり豪ドルは対ドル0.78台後半まで下落した。翌9日は「北朝鮮が核弾頭の小型化に成功し、ミサイル搭載が可能になった」との報道や、それに呼応する形でトランプ米大統領が「(北朝鮮は)世界が見たこともない炎と激怒に直面するだろう」と発言したことを受け、地政学リスクの高まりから豪ドルは0.78台半ばまで一段下落する展開となった。10日は一時0.79台を回復する場面が見られたものの、北朝鮮が弾道ミサイルを米グアム沖に打ち込む計画を発表したことを受け、豪ドルは対ドルで0.78台後半まで反落。その後、米7月PPIが前月比▲0.1%と市場予想(同+0.1%)を下回ったことを背景に、ドル売り地合いが強まると再度0.79台をタッチする場面が見られたものの、世界的なリスクオフセンチメントの高まりに株全面安の展開となる中、引き続き上値重い推移となった。11日もリスクオフの流れが継続し、一時週安値となる0.7839まで下落。その後、北米時間に発表された米7月CPIが市場予想比弱めの数字となると、全般的なドル売りの流れに0.79台前半まで上昇するも、トランプ氏が北朝鮮に対する軍事行動に言及したことを嫌気して再度0.78台後半まで値を下げた。引けにかけてはドル売り地合いに押される形でやや反発する動きを見せ、対ドル0.7900近辺、対円86.10円近辺で越週した。

今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。海外勢を中心にホリデーシーズンに入り、マーケットのメインピックスが不在となる中、先週に続き北朝鮮リスクに振らされる展開が予想される。具体的に島根、広島、高知3県の上空をミサイルが通過すると北朝鮮は日本政府に予告しており、それに伴いミサイル迎撃システムを配備するなどの対応が進んでいる。米国サイドではトランプ氏が軍事行動に言及したことに加え、先週の「炎と激怒に直面する」発言では「厳しさが足りなかったかもしれない」とさらに挑発的な発言を見せている。互いに後に引けない状況に追い込まれている可能性もあるため、万が一の軍事衝突リスクには警戒して臨みたいところ。高金利通貨の色合いが強い豪ドルはリスクオン相場では選好される一方で、リスクセンチメントが後退するタイミングでは売り優勢の展開となることが多く、特に先月の豪ドル相場は大きく上昇した為、ロングポジションの巻き戻しの動きには十分に注意したい。今週発表される経済指標等々で注目されるのは、15日(火)に発表される米7月小売売上高だろう。先週発表された米国の物価関連指標と同様、市場予想を下回る結果となれば一時的なドル売り地合いに伴う、豪ドルの上昇は想定し得るところではあるものの、北朝鮮リスクが落ち着くまでは上値の重い展開が続くと考えられる。豪州サイドからは15日(火)に豪州準備銀行(RBA)議事要旨(8月1日開催分)、17日(木)に7月雇用統計の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/7~8/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.7839 高値 0.7949 終値 0.7895
(対円) 安値 85.45 高値 88.02 終値 86.20



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。